

第5波 死者の2割 5代以下

新型コロナウイルス流行「第五波」で感染して死亡した人の20・6%は五十代以下で、一月上旬以前の3・8%と比べて割合が五倍以上になつたことが厚生労働省の集計で分かった。二十代以下の死者数は二十九人で、同年代の累積死者数六十三人の半数近くを第五波だけで占めた。

ワクチン接種が進んだ高齢者の死亡が減る一方、感染力の強いデルタ株の流行によって現役世代の感染が大幅に増えたため、年齢分布に変化が起きたと考えられる。専門家は現役世代にも早期に接種を進めていくべきだとしている。

厚労省の集計によると、ワクチン接種が始まる一月上旬までに報告された性別や年齢などが確認できた死者五百一一百九十五人のうち、96・2

%が六十代以上だった。最も多いのは八十年代で40・8%を占めた。

第五波に入った七月月中旬から九月上旬の期間では八百六十人が死亡。年齢分布は六十代以上の割合が約79・4%まで減少するなど変化が見られた。二十代以下は1・2%(十人)、三十代2・2%(十九人)、四十代5・6%(四十八人)、五十代11・6%(百人)だった。

東邦大の館田一博教授(感染症学)は「相対的に四十・五十代の重症化や死亡が目立つようになつたのは、間違いなくワクチンの効果だ」と話す。

厚労省の試算によると、今年七月の六十五歳以上の死亡数は、ワクチン接種で約八千四百人少なく抑えられた可能性があるとされる。